

CIR（国際交流員）の 多様な活用事例の紹介

JETプログラム（「語学指導等を行う外国青年招致事業」The Japan Exchange and Teaching Programme）とは、外国語教育の充実や地域レベルでの国際交流を推進することを目的として世界各国の外国青年を各地域に招致する、世界最大級の国際交流事業である。クリアでは、総務省、外務省、文部科学省と連携し、JETプログラムを推進している。

1987年（昭和62年）に始まったJETプログラムは、2012年（平成24年）に26年目を迎えた。参加者たちは、全国津々浦々の自治体や学校現場に所属し、地域の草の根レベルでの国際化に寄与している。

今回の特集では、さまざまな部局において国際交流を中心にした活動を行っているCIR（国際交流員：Coordinator for International Relations）について紹介をする。

1

CIRの多様な活用の現状について

（財）自治体国際化協会業務部支援課

はじめに

2012年12月1日現在、アメリカ、中国、韓国、ブラジルなどの27か国から356人がCIRとしてJETプログラムに参加している。以下、CIRを配置する任用団体に対して実施したアンケート調査の結果を基に、CIRの活動の現状についてまとめた。

調査時期：2012年7月～8月

調査対象：JETプログラムでCIRを任用する団体（2012年7月1日現在）

調査方法：オンラインで公開する回答用画面にアクセスして回答

回答数：189団体のうち134団体

興課、貿易担当課、市民協働課、市友好交流協会、地域振興課、人権政策課、大学（公立大学法人）等の回答があり、CIRが国際交流課（室）にとどまらずさまざまな分野の所属において幅広く活用されている。

選択肢名	回答数	割合
国際交流課（室）	100	74.6%
国際交流協会	6	4.5%
その他	28	20.9%
合計	134	100%

CIRの勤務場所

「国際交流課（室）」に配置している団体数が100（74.6%）と最も多く、「国際交流協会」に配置している団体数6（4.5%）と合わせると全体の約8割であった。

「その他」の内訳では、「教育委員会」が11団体と最も多く、それ以外では、商工観光課、観光振

CIRの業務（一般分野）

最も多かったのが「文書の校正（ネイティブチェック）または翻訳」で、次いで「通訳」であった。

また、「市民との国際交流教室」、「学校訪問」、「語学指導（学校以外）」が上位回答にあがっており、JETプログラムの主旨である地域の草の根交流に従事していることがうかがえる。

なお、少数ではあるが、「海外メディアのアテンド」、「留学生関係」、「老人介護施設訪問」の回答があり、CIRがさまざまな業務に従事している

ことがわかる。

(複数回答可)

選択肢名	回答数
文書の校正または翻訳	119
通訳	112
市民との国際交流教室	94
学校訪問	81
語学指導（学校以外）	70
姉妹都市交流事業	66
講演	53
情報誌の記事執筆	50
広報誌の発行	46
幼稚園および託児所訪問	46
JET参加者への研修会	45
海外視察、派遣授業	38
カウンセリング担当者（PA）の業務	30
語学指導（学校内）	25
海外メディアのアテンド	13
留学生関係	11
老人介護施設訪問	2
その他	20
合計	921

CIRの業務（経済分野）

最も多かったのが「訪日観光客の誘致」で、次いで「海外販路開拓・輸出振興」であった。

「その他」では、「外国人観光客向けパンフレットの翻訳」、「韓国との交流事業」、「経済分野の業務に係る通訳および翻訳」等の回答があった。

近年では、日本に対する知識や豊富な経験を有し、外国人観光客の視点で地元（赴任地）を見ることができるCIRが、自治体の観光客誘致の取り組みなど経済分野において活躍している事例が見られる。

(複数回答可)

選択肢名	回答数
訪日観光客の誘致	15
海外販路開拓・輸出振興	9
海外・国内での物産展の開催・見本市への参加	7
海外進出企業の事業展開支援	4
外国企業の誘致	3
経済交流にかかる協定等締結	2
その他	10
合計	50

CIRの業務（多文化共生分野）

最も多かったのが、「コミュニケーション支援」で、次いで「多文化共生の地域づくり」であった。

「その他」では、「外国籍市民の相談を行うサロンの運営」、「外国人向けラジオのパーソナリティー」、「職員、市民への外国語講座」等の回答があった。

(複数回答可)

選択肢名	回答数
コミュニケーション支援	48
多文化共生の地域づくり	33
生活支援	31
多文化共生施策の推進体制の整備	13
防災訓練	12
その他	11
合計	148

業務上の海外渡航

半数以上が業務で海外渡航が「有」と回答しており、多くのCIRが海外での国際交流活動に従事している。

選択肢名	回答数	割合
はい	68	50.7%
いいえ	66	49.3%
合計	134	100%

まとめ

近年、CIRに求められる業務は、従来の翻訳・通訳業務に加え、経済交流や多文化共生活動等の推進や支援など多岐にわたっていることが調査結果からもわかる。特に、2011年3月の東日本大震災の経験を経て、母国語と日本語が堪能なCIRは、地域の外国人住民支援において情報発信や相談窓口等の重要な役割を果たすことが期待され、活躍の場も広がりを見せている。

国際交流の転換期と言われている今だからこそ、CIRの活用の重要度が増している。

クレアとしてもCIR中間研修の内容をより充実させるなど、多様な業務に従事するCIRを今後も積極的に支援したいと考えている。

2

CIRによる活動事例の紹介

2-1 「多文化共生」とCIR

静岡県磐田市国際交流員 佐久真 ヘイミ 薫 (Sakuma Hamie Kaoru) (ブラジル出身)

私は、静岡県西部にある磐田市に配属されています。磐田市は、ヤマハ発動機株式会社の本社など、輸送機器製造を中心とした工場が集積しているため、外国人労働者の受け入れも多く、県内で2番目にブラジル人が多い市です（静岡県独自集計2011年末現在）。

2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災により、私が来日した当初に比べ、外国人登録者は減ったものの、定住・永住している方も多く、「多文化共生」は避けては通れない道です。

「多文化共生」とは？

「多文化共生」という言葉は、日本に来て初めて聞く方も多いでしょう。漢字で書くと、一目見て簡単に読める5文字の熟語ですが、最初は「これはいったい何のことだろう」と戸惑いました。

総務省の「地域における多文化共生推進プラン」（2006年3月）には、多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と記されています。これは、国籍などに関係なく、同じ地域の一員として、お互いの役割や義務を果たし、協力し合いながら、共に生きていく社会を表しています。

外国人登録者数が少ない市町村や地域国際化協会などで活動するCIRは、自分の母国の文化・習慣などの紹介や言語教室、国際交流全般に関する活動が求められる一方、外国人



が集住し、多文化共生のまちづくりを進める自治体に配属されるCIRの活動は「国際交流」だけではなく、「多文化共生」も意識することが必要だと思います。

私の仕事

2012年12月1日現在、356人のCIRが日本各地に配属されていますが、誰一人として同じ仕事をしていないと言っても過言ではありません。CIRの活動は幅広く、最初は「CIRって何をどうすれば良いのか？」と迷うこともあると思います。

私が磐田市にCIRとして配属されたのは今から4年前のことです。市の現状や課題等を知るため、最初の1年は市内の各地域で開催される自治会長の情報交換会、教育委員会主催の外国人児童生徒担当の研修会などに参加しました。

ブラジル人を含め、外国人児童生徒の不就学が課題の中、「国際交流」よりも外国人保護者への教育に関する意識啓発活動や外国人児童生徒を担当する教員を対象としたブラジルと日本の教育制度の違いを紹介する出前講座、母国で日本語教育に携わっていたこともあり、市内の外国人学校で日本語の学習支援をすることが多かった時期もありました。

しかし、現在はブラジルの紹介をする出前講座や外国人保護者の意識啓発活動の他、市職員向けのポルトガル語講座、自治会や行政のお知らせなどの翻



市の健康増進課で毎月開催される3歳児健診で、外国人保護者に日本とブラジルの教育制度の違いを説明



市内で外国人（ブラジル人）が最も多い中学校で、全校生徒を対象に出前講座



磐田市消防署でポルトガル語講座。人形を使って体の部位の言い方を紹介

訳を通じて、日本人と外国人が少しでもスムーズにコミュニケーションがとれるよう取り組んでいます。

CIRとしての4年を振り返って

この4年間、言語教室、出前講座、文部科学省委託の定住外国人の子どもの就学支援事業「虹の架け橋教室」のコーディネーター、そして人生初のラジオパーソナリティーなど、いろいろな仕事に挑戦しました。どれも、CIRとしてだけではなく、人として成長させてくれた仕事です。

印象に残っている仕事といえば、市内のショッピ



市内のショッピングモールにて開催したブラジル展にて、グッズの説明やお客さんの質問に答えている様子

ングモールで、2週間開催したパネル展とブラジルのお菓子作り教室です。両イベントを合わせて、述べ23,000人の方が来館・参加しました。

これまでイベントを企画することがなかった私にとっては大きな挑戦でした。

ブラジルの文化を紹介するだけではなく、イベントを通じて日本人市民と外国人市民にお互いのことをもっと知ってもらうため、いろいろと工夫しました。例えば、パネル展では地域のブラジル人店や文化教室の紹介コーナーを設けたり、お菓子作り教室では、バレンタインデーに合わせて、ブラジルスーパーで仕入れた材料を使ってブラジルのチョコ菓子

を作ったりしました。

慣れない企画でいろいろと大変でしたが、日本人からもブラジル人からも「良かった」とか、「新しいことを覚えることができた」などと、うれしいコメントをいただき、とてもやりがいを感じる仕事でした。

最後に

多文化共生のまちづくりを進めていく自治体において、CIRにできることはたくさんあると思います。CIRは、日本と母国の文化や言葉を良く理解しているため、日本人と外国人の架け橋になれるはずです。

配属された任用団体または自治体が抱えている課題を把握することはもちろん、「多文化共生」の概念や多文化共生のまちづくりに関する行政、各団体の取り組み事例なども調べておくと、多文化共生に携わる仕事のヒントになると思います。

磐田市は、「第2次多文化共生推進プラン」を策定していますが、このように推進プランを策定している任用団体に配属されたのであれば、それを一読したり、同僚や上司と話し合ったりするのも仕事を成功させる一つの方法です。

また、自治体によっては、JETプログラム以外の外国人職員やスタッフもいます。そういう先輩方とも情報を交換しながら、自分に何かできることを見つけ、日本人と外国人が共に生きていく「多文化共生」を少しでも実現できるような企画や活動を心掛けてください。

2-2 CIRから見た3.11

青森県八戸市国際交流員 ナタリー・クルッケンバーグ (Natalie Kruckenberg) (アメリカ出身)

私が青森県の八戸市でCIRとして勤務を始めて、もう2年半がたちました。八戸市は青森県の東南部に位置し、太平洋に面し、岩手県との県境に近い都市です。そして、港町と工業都市という2つの特徴を持っています。



ルチタスキング」のようなもので、その内容は翻訳・通訳、イベント企画から学校訪問、初級英語講座や英語研修、在住外国人支援まで、本当にさまざまです。しかし、今回の記事で紹介させていただきたいのは、日常の業務ではなく、2011年3月に東日本で起きた大災害での体験です。

3.11という日

東日本大震災は、JETプログラムにおける仕事だ

けではなく、その後の人生にも大きな影響を与え続けることは間違いないと思います。以前はテレビで自然災害を見たとき、「かわいそう」という気持ちしかありませんでした。あまりにも自分の日常と離れている出来事のように思っていたため、強い実感がなかったからです。しかし、東日本大震災後、そういうニュースを違う目で見えるようになりました。破壊された建物、避難場所や支援活動などのイメージを見ると、自分の経験を思い出します。この経験を言葉だけで伝えることは難しいですが、JET参加者をはじめ、日本に住んでいる外国人にとっても災害に関する教育が必要だと思うようになりました。CIRとしては、災害に備えること、災害が起きたときの仕事の役割等をきちんと把握することが大事です。

防災意識の大切さ

出身地のカリフォルニアでは、地震が起きたとき、頭を守るためにテーブルの下にもぐるように言われています。しかし、日本の場合、火事を防ぐためにガスを消して、逃げ道を確保するためにドアを開けておくことが常識です。そうしなければ、地震でドアのフレームが歪んで、ドアを開けられなくなる可能性があります。

八戸市職員は災害が起きたとき、災害初動体制マニュアルに従って行動します。各課とその課の中の人間はどういう役割があって、何を担当しているか、災害が勤務時間外に起きた場合など、さまざまなことが丁寧に説明されています。

CIRとしては、こういう職場の災害ルールを知っておくべきです。そして、災害体制マニュアルがあれば、家にもコピーを置いておくといいかもしれません。また、携帯にダウンロードをすることが可能であれば、災害が起きたとき、自分の役割と取るべき行動をどこにいても確認できると思います。情報発信する立場にいるCIRとしてもこのような情報をできるだけ早い段階で共有することが大事だと思います。



震災直後の事務所の様子

私は市役所に着いたら、iPhoneですぐにFacebookやSkypeで自分が無事で、安全な場所にいることを伝えました。青森県のPA（Prefectural Advisor :

カウンセリング担当者）にも自分の安否を知らせるメールを送りました。携帯がまだ通じる間に、できるだけ早く自分の安否を知らせたほうがいいです。

CIRとしてできること

災害支援と復興支援において、CIRはさまざまなことを任されることがあります。私は八戸市のCIRとして、市役所に来る外国人の対応をしました。県内にJET参加者もたくさんいますが、JET参加者の対応は、主にPAと呼ばれるカウンセリング担当がやってくれました。

近所の避難場所がわからず、市役所に避難した外国人もいました。保険や災害支援の体制の説明をしたケースもありました。また、外国メディアの方の取材を受けることもありましたが、電話対応も多かったです。日本に滞在している外国人を心配している親戚や、情報を集めている大使館等からの問い合わせの電話に追われる日々がしばらく続きました。

災害時における多言語での情報発信

しかし一番忙しかったのは、八戸市ウェブサイトの外国人に対する情報の翻訳でした。

翻訳の情報量と責任に圧倒されそうになるときもありました。そして、法律などに関する専門用語が多く、普段の翻訳よりも難しかったです。緊急に提供しなければいけないような翻訳は、言葉遣いよりも情報を流すスピードが大事になってきます。一方、家や大切な家族を亡くした人のための支援についての翻訳は、正確に情報を伝える必要があります。そういうとき、クレアや他の日本政府機関のホームページやインターネットなどのリソースを使いました。外国の人はFacebookなどのソーシャルメディアを情報収集に使うと思ったので、Facebookにも翻訳を載せました。

復興支援とCIR

災害の後、CIRはさまざまな場面で活用できるスキルを持っていると思います。外国人に対する情報発信はもちろんですが、被災した自治体と海外の支援団体との間の連絡体制においてもCIRは一役を担えると思います。私の場合、市営バスのためのディーゼル燃料の調達の調整や市役所と赤十字との間の調

整などの通訳も務めました。また、復旧作業を支援していた近くの米軍三沢基地にいる関係者と連絡したり、基地からのボランティア



被災した地域の様子

を災害ボランティアセンターや港の港湾管理課へ案内したりしました。

また、姉妹都市の米国ワシントン州のフェデラルウェイ市の人たちは、八戸市を心配してくれ、八戸の状況や募金の仕方などについての問い合わせのメールをたくさんいただきました。その問い合わせに対応したりするのもCIRならではのサポートかと思えます。

地域外国人住民の相談役のCIR

最後は災害に伴うストレスについてです。建物や

道路の復興は大事ですが、震災でつらい経験をした心のケアも必要です。仕事をしているときに、気持ちが混乱している人の対応をしなければいけません。私と私の同僚は何回か、災害のつらさから生まれる悔しさと怒りを周りにぶつける人の対応をしてきました。日本の公務員はクレームの対応などに関する研修に参加する機会がありますが、人と常に接する仕事をするCIRやALTにとっても大切な技術だと思います。

2011年3月に東日本大震災が起きてから、もうすぐ2年がたとうとしています。しかし、時間が過ぎても震災の教訓を忘れてはならないと思います。日本の各自治体が防災のさまざまな取り組みを強化していく中で、在住外国人に対する防災対策もしっかり立てていく必要があると思います。そうした中で、CIRの役割も今まで以上に重要度が増してくるのではないのでしょうか。

3

団体によるCIRの活動事例の紹介

3-1 CIRとともにめざす ～いしかわの国際化～

(財)石川県国際交流協会

はじめに

財団法人石川県国際交流協会では、JETプログラム「語学指導等を行う外国青年招致事業」により、1991(平成3)年にカナダのCIR1名が着任して以来、これまで10か国53名のCIRが石川県の国際化に取り組んでおり、現在は、ロシア、アメリカ、韓国、ブラジル、中国のCIR計5名が業務に励んでいる。彼らが勤務する財団法人石川県国際交流協会は、石川県における国際交流の中核的組織として、国際交流や国際協力活動とその支援および啓発活動、国際情報の提供など、県民と外国人との架け橋を目指して諸活動に取り組んでおり、本年度で設立20周年を迎えた。私たちとともに働くCIRの奮闘ぶりをご紹介します。

主な業務内容

国際交流員の主な業務は、大きく分けると下記の5つである。

- ①通訳・翻訳業務
- ②国際理解教室の開催
- ③広報誌の制作に係る取材・編集活動
- ④国際理解のための外国語講座の開催
- ⑤国際交流・理解イベントの企画・運営

これらはすべて、当協会における重要な事業でもあり、CIRは非常に多岐にわたる分野の各取り組みに深く関わっている。

①「通訳・翻訳業務」では、石川県や県内市町、国際交流団体などが行う、友好交流地域などとの多岐にわたる国際交流・協力事業における通訳・翻訳、

多言語化が進む行政サービスにおける各種資料の翻訳のほか、在住外国人の生活上の悩みごとを無料で専門家に相談できる法律相談では、外国人と専門家とが円滑にコミュニケーションがとれるように手助けも行っている。

②「国際理解教室の開催」では、県内の小中学校、高等学校などからの当協会への要請に基づいて、CIRが直接学校などに出向き、母国の文化や最新事情などの紹介を通じて、児童・生徒、一般県民がお互いの国の理解を深めることができる機会を提供している。



国際理解教室

③「広報誌の制作に係る取材・編集活動」については、県民や在住外国人を対象に、協会の活動PR、国際交流団体の活動状況などをお知らせする機関誌「IFIE PLANET（アイフィー プラネット）」（2回/年）や、石川県の文化や生活、イベント情報などを掲載する在住外国人向けの多言語情報誌「石川EXPRESS（石川エクスプレス）」（4回/年）を発行している。特に、多言語情報誌「石川EXPRESS」の制作では、CIRは、テーマの選定、現地での直接取材のほか、原稿作成から編集まですべてを行っている。



石川EXPRESS

④「国際理解のための外国語講座の開催」では、CIRが講師を務め、単なる語学講座にとどまらず、母国の文化やマメ知識なども交えながらの楽しい講座を実施しており、毎回、募集定員を超える盛況ぶりである。

⑤「国際交流・理解イベントの企画・運営」については、県民や在住外国人向けの国際交流・国際理解イベントの企画・運営を行っている。例えば、春は、留学などで来県したばかりの留学生などと県民のざっくばらんな交流の場を提供する「サロン de トーク」を開催し、ゲームを楽しんだり、軽食をとりながら話をしたり、CIRの計らいで初対面の外国人と日本人もすぐに打ち解けることができる。夏を迎えるころには、日本の民族衣装「浴衣」の着付け

と浴衣姿のまま日本三名園の一つ、兼六園を散策する「浴衣着付け体験」の手伝いをしたり、秋には、県民と外国人がお互いに理解を深めるイベント「多文化が共生する県民フェスタ」で母国を紹介するブースの設置や催し物の司会・進行を務める。



多文化が共生する県民フェスタ（2012年10月21日）

さらに、冬には、観て・知って得をする母国の映画を広く県民に観てもらおう映画鑑賞会を開催するなど、一年を通じて楽しい企画を次々に実施し、まさにイベント・ディレクターの一面も持っている。

そのほか、県内市町で働いているおよそ120名のCIR・ALTの悩み事などの相談にも逐次対応しており、大切な心の支えにもなっている。

このような場面にもCIR

これまでご紹介してきた業務のほか、石川県CIRは次のような取り組みでも活躍している。

- ①石川県日本語・日本文化研修プログラム（IJSP）のPR、誘致への助言および支援
- ②観光親善大使の委嘱による海外での石川県の認知度の向上

①当協会では、ホームステイをしながら日本語の学習と日本文化の体験を行うことができるプログラムを実施しており、諸外国の大学・公的機関から多数、研修生が参加している。CIRには、母国へ帰国後、新たな研修派遣機関の掘り起こしや本プログラムの周知の手助けをいただいている。最近では元CIRが窓口となり、新たな機関からの研修生が参加するなど、取り組みは徐々に実を結んでいる。

②2014（平成26）年度の北陸新幹線の金沢開業を見据えて、石川県では、諸外国への観光PR活動に力を入れており、口コミなどでその魅力を世界に広げていくことができるよう元CIRに観光親善大使を委嘱しご協力をいただいている。

今後の役割と期待

地域レベルの国際化の進展を目的に住民の方々とさまざまな取り組みを行うCIRには、地元に根ざした存在であるからこそ可能となる新たな役割も考え

られる。

例えば、災害発生などの緊急時における外国人への危険情報や対応情報の提供に対する支援である。外国人と日本人は災害などの緊急時における基本情報自体が異なっており、また、言葉や習慣の壁などもあり、有事の際には外国人は異国の地で大変不安な日々を過ごすことになる。

地域を支えるパートナーでもある外国人に安全と安心を届けるための体制整備など「多文化共生の社会づくり」に向けて、地域の諸事情に精通し、言語能力を活かしたCIRのさらなる協力が期待される。

また、特に、石川県では、本県に生活経験がある元CIRなどを会員とした「いしかわ同窓会」を組織しており、石川県を離れた後も、石川県の魅力を母国で紹介してもらうための情報発信や母国での出来事に関する情報提供、国内外におけるお互いの自主

的な交流活動などを通じて、世界と同窓会員と石川県のネットワークをますます広げていくことができれば非常にうれしいことである。



同窓会員が集い意見交換を行ったいしかわ同窓会シンポジウム（2012年10月20日）

最後に

CIRが石川県に生活し、仕事などを通じて得た経験は、何物にも代え難い、非常に貴重な宝物であり、日本語能力や石川県で得た日本および石川県に関する知識を存分に活かして、石川県の応援団として今後も引き続き石川県の国際化にお力添えをいただきたいと考えている。

3-2 新潟市におけるCIRの活動事例の紹介

新潟市経済・国際部国際課 小山 知樹

新潟市の紹介

新潟市は古くから日本海側最大の港町として発展してきた。17世紀には北前船の最大の寄港地として、また1858年には修好通商条約で開港五港のひとつに指定され、国際都市として世界のさまざまな都市との交流を深めてきた。現在では本州日本海側最大の拠点都市としての特性を活かし、北東アジア地域をはじめとして、「世界に開かれたまちづくり」を推進している。

【2012年9月末日現在】

- 新潟市の人口：807,804人（内外国人住民数：4,319人）
- 外国人住民数上位3か国
 - 中国：42%、韓国または朝鮮：23%、
 - フィリピン：8%

新潟市の現状および 国際交流員の主な活動内容

新潟市は、国際化の推進を目的にCIRの招致を1993年に開始。当初の3年間は英語圏CIRのみの招

致であったが、北東アジア地域との交流が一層活発化してきたことを受け、1996年からは中国、ロシアCIRの招致を、1998年には韓国CIRの招致を開始。また、もともと市民交流があったフランス・ナント市との交流が活発になったことで、フランスCIRの招致も1998年から開始した。現在では、5か国5名（アメリカ、中国、ロシア、韓国、フランス）のCIRが新潟市経済・国際部国際課と公益財団法人新潟市国際交流協会において、姉妹・友好都市との交流推進、市民向け国際理解教育、多文化共生のまちづくり、国際経済交流の促進作業などさまざまな業務に携わっている。

<主な活動内容>

①翻訳・通訳業務

- ・新潟市公文書、市内施設案内、観光パンフレットなどの各言語への翻訳
- ・海外来賓時の表敬通訳、接遇、国際イベントにおける通訳
- ・在住外国人向けの法律相談、生活相談などにおける通訳

②学校等における国際理解教室

- ・市内小中学校へ出向いての国際理解教室
- ・市内大学での学生向け多文化共生シンポジウムの開催



市内大学生との多文化共生シンポジウムの様子

③公益財団法人新潟市国際交流協会が発行する各言語別情報紙の執筆

- ・在住外国人のための情報紙作成
英語情報紙「イングリッシュ・ジャーナル」、韓国語情報紙「ハヌルタリ」、中国語情報紙「柳都漫興」、ロシア語情報紙「セゴードニャ」、フランス語情報紙「アゴラ」

④市民向け国際交流・理解イベントの企画運営

- ・CIRとの交流空間「おしゃべりサロン」
- ・韓国文化理解講座、フランス理解講座
- ・英語読書会「Books my teacher recommended」
- ・世界の家庭料理教室
- ・「アウトドアフェスティバル（スポーツ交流）」
- ・子ども向け絵本読み聞かせの会（外国語／日本語）



子ども向け絵本読み聞かせの会（ロシアの会）

⑤姉妹・友好・交流協定都市、またその他多都市との交流推進業務

- ・新潟市と交流のある主要都市
ガルベストン市（アメリカ合衆国）、ハバロフスク市、ウラジオストク市、ビロビジャン市（ロシア連邦）、ハルビン市（中華人民共和国）、ナント市（フランス共和国）、ウルサン広域市（大韓民国）、ハル市（イギリス）

CIRの活用例

CIRは市内小中学校からの依頼を受け、総合学習における国際理解教育の授業に派遣され、工夫を凝らした授業で出身国の紹介と日本との違いをわかりやすく教えている。5か国からのCIRが在籍していることからさまざまなニーズに応えることができ、派遣先から好評を得ている。CIRを国際理解教育に活用する場面は今後も増えていくと思われる。また、

海外とのビジネスチャンスを拡大し、地域経済の活性化を図る事業でもCIRが活躍している。新潟市は市内企業のビジネス機会創出を目的に、海外の見本市へ市内企業と共に積極的に出展している。一例として、ヨーロッパ各国で開催されている航空ショーへは市内企業と市が共同で出展しており、各国からのバイヤーと商談を行っている。この現場でCIRが市の産業PRに活躍している。今後は文化交流活動に加え、海外市場との交流促進活動への参加機会が増えると思われる。

CIRの活用案

今後期待したいこととして、CIR自らが企画、立案し、遂行までを主体的に行う事業の拡大が挙げられる。既に市内学生向けの多文化共生事業はこの形態で実施されている。CIRが主体となって事業に関わることで、市内在住外国人支援のさらなる充実につながることが期待される。

CIRの招致を開始してから約20年が経過し、これまでの参加者は約40名にのぼる。彼らには新潟市CIR同窓会の会員として、市の海外活動へ可能な限り協力してもらいたいと思う。また、その協力体制を築けるよう、同窓会員への情報提供も適宜行いたい。新潟まつり参加時のCIRの浴衣姿



新潟市CIRからのコメント

○ロシア・ドミトリー・カームリヤ

新潟市のCIRとして勤務して3年目になります。国際理解事業等を通じて、外国人に対する固定観念を変え、グローバル化の時代に日本人と外国人がお互いの文化・習慣を尊重しながら仲の良いコミュニティになるように他のCIRと一緒に頑張っています。

○韓国・河関恵（ハ・ミンヘ）

アンニョンハセヨ！対岸諸国との交流にあたって「ゲート・シティー」の役割を果たす新潟市で、CIRとして交流事業に関わっていることがうれしいです。通訳・翻訳はもちろんですが、学校訪問や市民講座など、いろいろな場面で出会う人々とのつながりが私にとって宝物です。国際交流は人と人の絆で

もっと深まると思います。これからも出会いを大事に、隣国である韓国と日本のさらなる友好発展に最善を尽くしたいと思います。

○中国・于飛(ウ・ヒ)

中国ハルビン市から来ました。大学で日本語を勉強し、対日貿易などの仕事をしていました。自分の目でこの国を見たかったので、JETプログラムの機会を得て、昨年4月から勤務しています。この仕事を通じて、両国の国民にもっと深く理解・交流してもらい、成果が残せるよう頑張りたいと思います。

○アメリカ・ザッカリー カプラン

2年目のCIRです。新潟市で働き、学校訪問など

の交流もさることながら、大学での多文化共生ワークショップや自分が担当する米国文学読書会を通じて市民とともにお互いの価値観を探り合う場ができ、感激です。今後も多文化共生の概念を考えながら頑張りたいと思います。

○フランス・サミュエル ビト

私は昔から憧れのCIRの仕事に誇りを持っています。着任してまだ5か月ですが、これまでの業務から多くの経験を積むことができました。若年層の国際理解の推進を目的とした学校訪問、多文化共生に興味を持ってもらうための交流会等は国際化において欠かせない、やりがいのある仕事だと感じています。

3-3 国籍を問わず暮らしやすい地域を目指して

北海道ニセコ町企画環境課

ニセコ町の紹介

ニセコ町は、北海道の南西部、札幌から約100kmに位置し、人口は約4,800人と小さな町であるが、年間約150万人の観光客が訪れている。近年は、さわやかで過ごしやすい夏や、美しく良質なパウダースノーを求めて、アジア地域を中心に世界各国から外国人観光客が増加するなど、国際観光地として注目されるようになり、海外資本による開発や投資が活発化してきた。2001年は約10人であった外国人登録者数も、この10年で10倍以上の約120人に増加し、地域の国際化が急速に進んできている。

これらの急速な国際化に対応するため、2011年度にCIRの招致を開始するとともに、ニセコ町国際交流推進協議会を設立し、町民の国際理解の向上に取り組んでいる。2012年1月には、北海道インターナショナルスクール・ニセコ校が開校され、今後も外国からの居住者の増加が予想されている。

ニセコ町の現状およびCIRの主な活動内容

<現状>

近年の外国人観光客の増加に伴い、外国語を話す職員の需要は高く、これまで、商工観光課にオセアニアや東アジア出身のスタッフを配置し、積極的に観光振興を推進してきた。今後さらに、国際的

ゾート地としての魅力と地位を高め、情報発信を強化していくために、2011年度に中国とオーストリアから、2012年度に韓国からCIRを招致した。

また、外国人登録者の急激な増加により、在住外国人への「情報共有」(ニセコ町まちづくり基本条例の柱)が難しくなり、生活支援などのサポートも必要となってきている。同時に、町民の国際相互理解の推進の必要性も高くなり、2012年度にカナダからCIRを招致した。ニセコ町国際交流推進協議会でのCIRの活動により、国際文化交流活動を活発化させ、ニセコ町民との交流を進めることとしている。

<主な活動内容>

現在、商工観光課に3名(内1名は、(株)ニセコリゾート観光協会勤務)、企画環境課に1名の計4名のCIRが活躍している。それぞれの配属先によって業務内容が異なる。

○商工観光課○

商工観光課では、主に海外からの来訪者や滞在客向けとして、観光パンフレット、国際会議誘致の資料および、地域のレストランのメニューなどの翻訳業務を中心に、町のFacebookや観光関係ウェブサイトが多言語化(英語・中国語・韓国語)などを行っている。

また、自国へのプロモーション活動、自国からのメディアの対応、視察の受け入れもしている。事例

考えて行動する積極的な姿勢が求められているといえる。これからも、与えられた仕事だけではなく、CIRとしてニセコ町で何かできるか、どのような活

動をしたいかを考え、職員と協力し、地域の価値を高めていくために活躍していただきたい。

3-4 八百津町におけるCIRの活動事例の紹介

岐阜県八百津町役場産業課地域振興係 山田 和実

八百津町の紹介

岐阜県中東部に位置する八百津町は濃尾平野の裾野にあり、町の南部に流れる木曽川兩岸の平野部と山間部からなり、南を望めば伊勢湾、北を望めば乗鞍岳、西は伊吹山、東は恵那山を見渡すことができる、人口12,228人(内外国人71人)、面積128.81km²の山紫水明の町です。

また、八百津町は第2次世界大戦中に6,000人のユダヤ人を助けた杉原千畝の生誕の地でもあります。そのことから氏を顕彰し後世に伝えるために1994年に「人道の丘公園」を開園、2000年には氏の生誕100周年を記念して「杉原千畝記念館」を開館しました。

CIRの主な活動内容

八百津町では世界に向けて平和への情報発信を行うために、1996年7月イスラエルより初代CIRハニト・リバーモアを迎え、現在7代目メイトル・レヴィンが活躍しています。歴代イスラエルからのユダヤ人のCIRを迎えていることから、「自分たち家族(民族)がこうしていられるのは杉原のおかげ、その八百津町で働くことができるのを誇りに思います」と、どのCIRも真摯な気持ちで八百津町を訪れます。

当初、八百津町でのCIRの活動は町民に対しての国際理解と杉原千畝顕彰のための活動として、町内小中学校へ赴き遊びを通してイスラエルの文化の紹介、老人クラブ、各種団体の会合などで講師としてイスラエルの観光や歴史文化の紹介を行うと同時に



敬老会時にイスラエルと日本の文化の違いを紹介

杉原千畝氏の功績を伝えていました。また、八百津町を訪れる要人や外国人に対しての通訳業務や海外からの手紙の翻訳、八百津町のホームページや観光パンフ

レット等の英語版、ヘブライ語版の作成などの業務を行うだけでなく、国際交流の自主事業を企画し「ヘブライ語教室」「ハヌカの料理教室」や「プーリムカーニバル」などイスラエルに関する事業を行っていました。



現在では、杉原千畝記念館が開館したことから、記念館でユダヤ人からみたホロコーストや杉原千畝の講演を行う杉原千畝記念館での説明をしています。来館者は年間約2万人であり、中でもイスラエルからの観光客が1,300人～1,500人いるため、ヘブライ語による案内も行っています。そして世界中にいる杉原千畝に助けられた家族の方々やその関係者、各国のホロコースト記念館と杉原千畝記念館との橋渡しを行い情報や資料の整理を担っています。その中で一昨年度は2代目CIRのモイセ・スマダールからの提案によりイスラエルの小学生と八百津小学校の生徒との年賀状の交換を行いました。また2012年9月にはCIRのメイトルの企画によりユダヤ歴5773年の新年のNew Year Cardを世界中の関係者に発送し、新たな信頼関係を築きました。特に情報の少なかったカナダ在住の杉原サバイバルの方々から当時の話、感謝のメッセージや貴重な資料の映像提供を受けることとなり、来年度杉原千畝記念館での公開に向けて作業を進めています。

また、毎年8月に杉原千畝顕彰事業として行われる「杉原ウィーク」では裏方として短歌大会や星空コンサートに協力しています。

そして2012年は日本とイスラエルの友好60周年の記念の年であることから、イスラエルの観光エージェントと協力して、子どもたちが平和を願ってくれるようにと子ども絵画展を企画し、八百津子ども絵画展の様子



町とイスラエルの子ども60名の作品を八百津町とイスラエルで展示しました。特に八百津町では八百津小学校が人道教育で取り組んでいる演劇「メノラの灯」の上演会に先立ち展示を行いたくさんの町民の方々に見ていただきました。

このようにCIRは八百津町とイスラエル、ユダヤ人との橋渡しを中心に、国際理解のために、学校や各種団体でのレクリエーションや言葉遊びなどを通じて異文化交流、町広報紙や町ブログでのイスラエルの様子や日本との違いを面白く伝える異文化の紹介、ヘブライ語講座、料理教室やイスラエルのお祭り「プーリムカーニバル」などを開催する異文化体験、そして杉原ウィーク星空コンサート開会式での挨拶など町民に向けて平和へのアピールなど行っています。

また、国際交流協会の一員として、協会ホームページの掲載を担当し八百津町の異文化交流の紹介をしたり、観光団体との交流会を催し、着付け体験や折り紙など遊びの体験ができるよう企画したり、産業文化祭ではイスラエルのお菓子「オゼハマン」を作って販売したり地球儀による国当てクイズを行うなどユニークな活動を行っています。しかしどれも母国イスラエル、ユダヤ人を中心として発信しているため



イスラエル観光団体の着付け体験

に、協会の活動の1つとしての町内に住む外国人相互のネットワークができていないのが課題となっています。

今後のCIRの活用等について

今後CIRに望むことはCIRとして町民に親しまれ、異文化への理解を深める活動や杉原千畝の顕彰活動だけでなく、「人道の町やおつ」として世界へ平和のための情報発信ができること、また、町内在住外国人との交流ができ行政情報や災害情報の提供ができるなど八百津町役場のコンシェルジュとしての役割を望みます。

最後になりましたが、歴代のCIRは帰国後、母国イスラエルで貿易・観光関係、放送関係の職に就きいまだに杉原千畝、八百津町との関係を保っています。初代ハニト・リバーモアに至ってはCIR時代に長男を出産し、帰国後も「やはり八百津が良かった」と八百津町に戻り現在5人の母親として八百津町の国際化に貢献しています。

現在CIRのメイトル・レヴィンは東北の震災や原発問題での一時帰国や長男出産による産休などCIRとして日本を体験する場が少なかったことは否めませんが、残りの時間で八百津町の良い所、日本の良い所をもっともっと見聞してもらい、帰国後も八百津町と世界の橋渡しを担ってくれることを強く望みます。

4

元CIR参加者からのメッセージ

4-1

元長崎県平戸市国際交流員 レムコ・フローライク (Remco Vrolijk) (オランダ出身)

1. CIRとしての勤務期間：

2007年8月～2012年7月

2. 現在の勤務先：

長崎県平戸市役所

3. CIRをしていた時の主な仕事内容：

姉妹都市交流事業の企画、翻訳・通訳、学校訪問、



イベント企画

4. CIRとして一番思い出に残る企画または経験：

平戸で日本初の西洋建築物の平戸オランダ商館が復元され、2011年にオープンした際、私が「平戸オランダ商館カピタン」（儀礼商館長）として秋篠宮ご夫妻とお会いできた経験が一番思い出に残っています。

5. あなたにとってCIRとは：

CIRは仕事内外に市民と市職員との交流を通じて、外国に対する意識とイメージを変えることができる上、地元の人と外国との架け橋になれる人材です。

6. 今後CIRはどのような場で活躍できる機会があると思いますか：

CIRは日本語と日本文化が理解できる、国際的な視点も持つ人材です。とにかく外国に関する事業に活用すれば、重要な役割を果たすことができる

と思います。特に観光PRや外国人へのおもてなしに必要な整備等において、CIRの意見が非常に参考になると思います。事業の内容や方向性などが固まった後CIRを使うのではなく、方針を決める段階からCIRを巻き込んだ方が効果的かと思います。

7. 先輩としてのアドバイス：

コミュニティと職場で、できるだけ早く、できるだけたくさんの人と交流した方が、楽しいだけでなく有意義な経験になります。

4-2

元千葉市国際交流員 リサ・マリン (Lisa Mallin) (カナダ出身)

1. CIRとしての勤務期間：

2006年8月～2008年7月

2. 現在の勤務先：

カナダ外務省 国際貿易部

3. CIRをしていた時の主な仕事内容：

千葉在住の外国人や海外からの外国人訪問者の通訳、公文書や観光パンフレットの翻訳、市民を対象とした語学講座、異文化理解講座、日加文化交流イベントなど。また、千葉市の姉妹都市（例：カナダ・ノースバンクーバー市、アメリカ・ヒューストン市）の青少年交流事業にも携わっていました。

4. CIRとして一番思い出に残る企画または経験：

北京オリンピック直前に行われた石垣トライアスロン大会で全国から集まった15人のCIRと大会支援を行ったことが最も印象に残っています。私たちボランティアはトライアスロン出場選手と石垣島を結ぶ架け橋となり、空港での出迎え、記者会見の通訳、市内案内などを手伝いながら、特にCIR同士の交流を深めることができました。そして、シドニーオリンピック金メダリスト、サイモン・ホイットフィールド（カナダ人）の通訳を任される機会にも恵まれました。

5. あなたにとってCIRとは：

多文化交流の架け橋となる人材。母国の文化、歴史、言葉を理解でき、時には日本人よりも日本文化、文学に詳しい、貴重な存在です。言語の壁が



ないからこそ、新鮮な視点から日本社会を見ることができ、外国人向けに日本のことをPRできるユニークな立場にある人。

6. 今後CIRはどのような場で活躍できる機会があると思いますか：

CIRは「世界への窓口」そして「日本への窓口」として、一人二役を果たせるような立場なので、地域レベルや国際レベルの交流を支える機会に恵まれたら、さらに活躍できると思います。一般的に、CIRは地域レベルでは翻訳や通訳、在住外国人向けの支援活動、語学講座、異文化理解教育などさまざまな場面で活躍しています。そして多くのCIRは雇用先の「観光PR看板娘・息子役」まで果たしています。インターネットとパソコン一台があれば何でも世界へ発信することができる時代だからこそ、CIRの長所を活かし、もっと全面的に所属先自治体の観光PR活動に参加できる機会を作ることが大切です。

7. 先輩としてのアドバイス：

JETプログラムは世界最大規模の国際交流事業の一つです。JET参加者でしか経験できない体験を自ら発見して、その経験を活かすことが将来の自分や、このプログラムの成功につながると思います。CIRとして、できるだけ多くの事業に参加して、挑戦することを勧めておきたいと思います。

4-3

元島根県・元滋賀県国際交流員

ジェームス・スプリット (James Split) (アメリカ出身)

1. CIRとしての勤務期間：

2007年8月～2012年7月

2. 現在の勤務先：

米国特許商標庁

3. CIRをしていた時の主な仕事内容：

PA（滋賀県内JET参加者のカウンセリング担当）
業務・翻訳



4. CIRとして一番思い出に残る企画または経験：

思い出に残る経験は多くあるのですが、随行通訳の時をよく思い出します。特に、James Beard Foundationからの派遣団と日本庭園研究団を手伝った経験は一生忘れられません。

5. あなたにとってCIRとは：

CIRは日本語、日本の文化、また自分の国の文化

について知識を持っている人として、外国人と日本人の距離を近づける「パイプ役」だと思います。

6. 今後CIRはどのような場で活躍できる機会があると思いますか：

日本在住の外国人はまだ、社会に貢献できるユニークな存在としてだけではなく、常にサポートが必要な「お客様」として捉えられる場合もあると思います。CIRはその中で、外国人と日本人をつなぐことによって、多様性のある強い日本のサポーターとして活躍できると思います。

7. 先輩としてのアドバイス：

慣れるまではCIRの仕事にさまざまなストレスを感じることもあるかもしれませんが、時間がたてばたつほど仕事に対する充実感がわいてくると思うので、頑張ってください！

4-4

元三重県松阪市・元三重県国際交流員

ヴィシャル・ジャニ (Vishal Jani) (アメリカ出身)

1. CIRとしての勤務期間：

2008年7月～2011年7月

2. 現在の勤務先：

大学院生。国際貿易兼産業開発計画を専攻



3. CIRをしていた時の主な仕事内容：

コミュニティセンターでの交流イベントの企画・実行、外国人のための日本語教室、地元テレビ局で放送される国際交流番組への協力、翻訳、海外から来県する企業や政府関係者のアテンドおよび通訳等。

4. CIRとして一番思い出に残る企画または経験：

200人の参加者を受け入れた経済交流セミナーを同僚と4か月をかけて企画し、セミナー当日知事の側に付いてさまざまな方々と交流できたこととそれによる達成感を忘れられません。また、幼稚園を訪問する度に、「ヴィシャル先生だ！」との響きを耳にしていたことも記憶に残っています。

5. あなたにとってCIRとは：

自治体がかかわる企業立地や地域開発や多文化共生・国際理解などの手助けをする人材。また、CIR勤務終了後も、知日派として日本社会に貢献していく人。

6. 今後CIRはどのような場で活躍できる機会があると思いますか：

分権化、空洞化が続く日本産業にとって、CIRは世界各地に散在されている潜在的な投資やビジネスチャンスなどを探り出せる人材になることが十分考えられます。また、日本の各自治体が今、力を入れている観光や多文化共生の分野においても、これまで以上にCIRは重要な役割を果たすに違いないと思います。

7. 先輩としてのアドバイス：

「やり切れない」、「しんどい」という日は誰にでもあるものです。そういう時、周りの友達と同僚に遠慮なく助けを求めてみてください。